

随 想

地学教育を思う

沓岐勝本町霞 小学校
林 徳 衛

理科教育と言われるものの中で、生物、化学、物理などの分野に比べて、地学はたしかに見劣りがするし、軽く見過され気味であることは、一般的にいいないめなないであろう。

人、生れて産湯を使い、死に際しては末期の水といい、むつかしい時には石の上にも三年などというかと思うと、病に取りつかれると、薬石といって大騒ぎ……

然るに何と世人の、地学に日頃の関心の浅く、かつろすいことよ。一体これはどうしたことか、どこからこうした状態を醸し出すのだろうか。

小学校のはじめのころ、子供たちを海岸や河原に伴って、石を拾わせたり、砂や土をいぢらせると、この上なく喜び、日頃気付かなくて見過していたものを発見して驚異的な関心を示す。私は曾て、それはそれは素晴らしい金ピカの金鉱石を手に入れたので、持ち帰って家族に披露説明したことがある。ところが、翌朝まだ家のものが寝ている中に起き出した四つになる女の子が、家の近くから手頃な石ころを拾ってきて、「お母ちゃん、これに金が入っていないだろうか。」と炊事場で尋ねているのを聞いて、はっと胸打たれた記憶がある。その女の子が高校時代、修学旅行に出る朝、「おみやげは何を買って来ようか」といったので、「たしかな石」を求めたとこ

ろ、帰ってからいうことには、「日光に行っても京都をまわっても、先生は石のことには一言もふれなかったので、明治神宮に行った時、バラスを一掴みもってきたよ」とのことであった。これは私の家庭のはしたない出来事に過ぎないが、「子供の成長と地学への関心」というテーマに立って、地学者や、地学教育者に他山の石としてお考え願いたいという切々の心情から引例した次第である。

今日、地学は他の分野に比べて著しく見劣りがする。小・中・高校に於いても、文部省の理科教育振興法に基づく施設設備の中で、地学についての備品購入は皆無といってよい状態である。これは、この法案を編まれた当時の当局者の中に、地学者がいなかったであろうことも考えらるが、一般通念として、地学が敬遠される実証でもあらうと思われる。

まづ地学者や地学研究者の絶対数が少ないということ。若い学生で地学に志す人が極めて少なく、これにかじりつこうとする人は、餘程のかわりものが、行先を見失った気まぐれである。更に若い人をこのような状態に追いこんだことは、夫れ夫れ考えられる原因もあるが、第一に直接大きな障害となっているのは、高校時代の教師の力である。大体生物や、化学の人が、玄武岩や安山岩みたいな石にかじりつこうということに根本的に無理

があり、不可能がある。

大学では研究室の不足からくる収容学生の絶対数が極めて少いということ。勿論指導陣、研究陣も他に比べて小規模であり、予算面でも、むしろ辛うじて命脈を保っているといってもよいくらいにしかすぎない。

一頃鉱山業はなやかなりし頃は、大学や専門学校を出た地質屋さんが、大学の一部を除いて、学校の先生にでもなるような人は殆んどなく、今日の高等学校で地学を教えるのは片手間扱いにしかされていなかった。こうした学校で、鉱物や岩石のような、変化に乏しく静的で、しかも結晶みたいなことをやたらと、物知り顔に宣伝されたら、もうこりこりで、今後一切こうしたことは好まないどころか、全く毛嫌いするようになったというのが実態である。

だから

次のようなことを、今後の地学教育にたずさわる人々に期待したいのである。

(一) あなたは、まず手始めに、奥さんや、お子さんたちを日曜毎に野外に連れ出して、共に楽しめるようにする通俗的地学宣伝技術を試みて、これに成功し得るや否や。これが今日の地学の社会的地位を高め、広める第一歩であろう。雨の時には、図上の仕事やサンプルワークなど、晴雨寒暑四季を通じて一ケ年だけ、自らの教育教化刀をためて見給え。これに成功し得れば、まずあなたは今日の要請に合格したといえる適格者と自任してよいであろう。何となれば、地学の根本は物理や

数学にあるにせよ、今日当面してあなたたちは、天象を語り、地文を説いて、大いに地学の社会的認識を高揚すべき先兵だからである。

(二) 地学のうち、特に地質は実地にあたり、現場に立たなければ、およそ意味がないことだし、書物や、黒板だけでは理解し難いものである。現地にあたって事実を説明すれば、容易に解けることも、ノートだけでは断じて分りっこないことが多いもので、さすが地学と言われる所以である。天文またしかりで、星座を何度説明しようとも、一回の実地観測の方が、はるかに効果的であることは、どなたも経験ずみのことであろう。

それだけに、地学の先生たらんものは、いつも土や石と親しみ、常に手がよごれていくてはならない。世俗にいろいろな、よごれた手ではなくて、お医者がヨーチンくさいとか、アルコールくさいといわれると同義的な意味での要請である。

彼等の幼いたましいに、成長期の心情の中に、野外で接した先生の姿や雰囲気は、末長く忘れ難い印象となって、師弟愛もつながりの深いものとなる。かくして育った教え児たちの中からは決して不良化も起らない。人間的なたましいが触れ合うからであろう。

(三) 誰にも先生であり得よということ。直接にたずさわる相手は、小・中・高の子供であるが、相手をこれに限定しては、一向につまらない。農家の人にも、町長さんにも、少くとも斯のことについては、話のお相手になり、場合によっては学問上献策も出来

だけの勉強もし、特に管下の地域について お話ができ、長講一席を弁ずる自信を持ち
は、どなたがお出で下さっても、確信をもつ 得るまでになってほしいものである。

定例懇談日の開設(第1土曜)

9月以降、毎月第1土曜日午後、理事の方をはじめ、会員の方々が自由に集って頂き、本会が主催する行事の相談、会誌の編集、資料の交換、研究上の討論、その他諸々の懇談を致したいと思います。寄贈された雑誌もその時読んで頂けます。とかく忙しい昨今ですが、もうじき満2才を迎える地学会をすこやかに育て、併せて会員自らの研修の為、気楽に集って話合いまししょう。場所は当分の間、長大学芸学部地学教室にしますが、いずれは県北(佐世保市)にも何処かお願いしてはどうかと思っています。うまく軌道にのれば、その都度場所を変えて、よその学校の設備を見学する機会にもなると思います。(Y・K)

原稿募集

研究発表、新知識の紹介や解説、会員相互の連絡などを行なり、本会誌の機能を充分発揮するために、ふるって投稿され、長崎県地学の発展に努めて頂きたいと思ひます。随想や“他山の石”の記事も歓迎します。また教材研究的資料の発表も期待しています。原稿は必ず400字詰原稿用紙に横書にして下さい。図や表は本文とは別に書いて、本文の横に挿入位置をして下さい。第3号の締切は11月15日頃にします。